

## 中世の熊野信仰と地域社会（二）

— 新宮氏・新宮城と新宮熊野神社 —

都築 繁利      伊藤 喜良      伊藤 理

### 一 はじめに

「中世の熊野信仰と地域社会（一）」において、中世における南奥羽新宮熊野神社の復元を試みた。現在残されている建造物、宝物、遺跡等から、この神社の創立時期、その様態について、本山である紀伊国熊野三山と比較・検討しながらみてきた。その結論は、創立期の新宮熊野神社は、紀伊国三山を忠実に模倣し、整然と整備され、小形化したものであったといえる。

ところで、この新宮熊野神社から500メートルほどの場所に「大城」と江戸時代には呼ばれていた城跡が存在している。この城は新宮城と称し、中世の喜多方地方、とくに室町時代に国人領主として大きな勢力をえていた新宮氏の居城であった。新宮城は2008年に国指定の史跡として認定された重要な歴史的遺跡である。

本論文は、きわめて近くに存在する国人領主の城と、中世の有力な在地神社であった新宮熊野神社とはどのような関係にあったのか、会津地域の中世の歴史を通してみたいとしたものである。この両者の関わりを通して、この地域がどのような特徴を持った地域であるか検討し、国人領主と熊野神社・熊野信仰の在り方をみて、日本の中世社会の様態と、会津地域の特性についてみようと思う。

## 二 中世の会津をめぐる

本稿と関わりのある点のみについて「会津の中世」について述べておこう。会津地域の中世の開始は12世紀ころのことである。会津地方は古代以来越後国と政治・経済・文化等、あらゆるものに関して深い関係を持っていた。12世紀に越後国では城氏とよばれる氏族が勢力をえてきて、会津地方にも進出してきた。河沼郡会津坂下町に陣が峰城跡とよばれる史跡が存在している。発掘調査の結果、二重堀の存在が確認され、出土遺物は12世紀前半のものが大半であるとされている。それゆえ、城氏が築いた城館である可能性も指摘されている（『会津坂下町調査報告集』60集、『陣が峰城跡』Ⅰ福島県河沼郡会津坂下町教育委員会）。陣が峰城の辺りは12世紀前半には会津蛭河荘となっており、この荘は摂関家領として立荘されている。越後城氏と摂関家との関係から、蛭河荘は城氏の支配下にあったのではないかと指摘されている（『会津坂下町調査報告集』58集、『陣が峰城跡』Ⅱ福島県河沼郡会津坂下町教育委員会）。後に述べる新宮氏も越後国と強いつながりを持っていた。

一時会津盆地は平泉藤原氏の支配するところとなったのであるが、鎌倉幕府の成立後、平泉藤原氏が滅亡し、また建仁元年（1202）に越後城氏も幕府に抵抗して敗北した以後は、相模国の豪族である三浦一族が会津の多くの所領を拝領して大きな勢力を持ったのであった。鎌倉時代初期、鎌倉幕府の樹立に功のあった三浦義明の子佐原十郎義連が、「奥州合戦」の恩賞として、源頼朝より会津を賜ったのが三浦一族による会津支配の始まりであると『新編会津風土記』等に記されている。鎌倉時代には会津地域の郡や荘には地頭が設置され、三浦一族にも地頭職が与えられている。しかし鎌倉時代中頃以後は会津の荘園や郷の地頭職の多くは北条氏のものとなっていった。鎌倉幕府滅亡後の元弘三年（1333）七月十九日付の後醍醐天皇の綸旨によれば、北条顕業の会津の所領が新田一族の岩松経家に与えられており、会津地方も北条氏の所領が多く存在していたことが知られる。それゆえ会津の三浦一族も北条氏と深い関わりを持ちながら所領を維持していったものと考えられるの

である。しかしその詳細は不明な点が多い。このような会津地方の荘園の中に新宮荘という荘園が存在していた。新宮熊野神社の神官はこの時期、鎌倉まで赴き、頼朝に直訴して200町の所領を拝領したと伝えられている（『新宮雑葉記』）。新宮熊野神社の所領であったとみられる新宮荘の正確な範囲は不明であるが、後に検討する新宮氏はこの荘園に何らかの権利を持っており、この地名を姓にしたものと思われる。また、新宮氏は三浦一族の子孫ではないかといわれているが、確証はない。

南北朝動乱期になると三浦一族の活動が古文書など多くみられるようになってくる。それらの諸氏の中から蘆名氏が台頭して、会津の中で主導権をとるようになってきた。蘆名氏は鎌倉幕府の創立に功があった三浦義明の孫である盛連の四男光盛が相模国葦名郷を領有して葦名（蘆名）と称したことから始まった。そして鎌倉末期には会津に所領を持っていたと推察されている。南北朝期には足利尊氏に属して活動しており、会津の守護代を名乗ったり、会津郡守護と称したりして、この地域の軍事指揮者として活動している。また会津地域と北関東地域は密接な関連があり、北関東で起こった南北朝末の小山氏の乱は会津に波及し、鎌倉府に反旗をひるがえして会津に逃げ込んだ小山氏が会津の蘆名氏に討たれたりしている。室町時代になると蘆名氏はさらに勢力を拡大し、会津郡、耶麻郡、河沼郡、蜷河荘等の軍事指揮権、検断権を握り、会津の守護と称するようになっていった。

会津地域は南北朝時代末までは室町幕府が管轄していた。しかし、前述した小山氏の乱等があったことにより、幕府は関東と奥羽を統一的に支配することが得策と考えたのであろうか、奥羽は鎌倉府が支配するようになったのである。応永六年（1399）春、鎌倉府の公方である足利満兼は弟の満直と満貞を陸奥国・出羽国の両国を統治させるために篠川（現福島県郡山市）、稲村（現福島県須賀川市）に下した。この両者を篠川公方、稲村公方と呼んでいる。「永安寺殿（足利氏満のこと、満直・満貞の父親）の遺戒に今若御曹司、乙若御曹司の兄弟を奥羽両国の御主にすべしとのことで、鎌倉殿（満兼）の御台様、伊達入道、白川入道を召されて障子越しに、今若を下すこと、

伊達を父と頼み、白川を母と頼むべきよしを仰せられ、両若君を下した」と後の時代に書かれた「余目旧記」は述べているのである。しかし、この両公方の南奥羽地方への下向はこの地域に強い緊張関係を生み出したのである。両公方が下向した後、一年ほど経つと伊達氏や蘆名氏等が反乱を起こし、さらには、両公方と協調関係を模索するような仙道一揆と呼ばれるような中小国人による一揆が結成されたのである（伊藤喜良「国人の連合と角逐の時代」『中世奥羽の世界』東京大学出版会）。新宮熊野神社と深い関係にあった喜多方の在地の国人であった新宮氏も激動に巻き込まれていったのである。

### 三 新宮氏と蘆名氏をめぐって

新宮氏が何時から会津北部に入ってきたかの詳細は不明である。しかし、鎌倉末期ごろまでに新宮荘や新宮熊野神社を中心に支配を進めていったものと考えられる。新宮氏の会津地方での活動は断片的に鎌倉時代末期から知られている。例えば、後の史料であるが『新宮雜葉記』によれば、元亨四年（1324）の年号のある新宮熊野神社の御正体（懸け仏）の銘に「大旦那左衛門尉平時明」とあり、また『会津旧事雜考』にも、正中二年（1325）の御正体に「当荘惣地頭平時明并一族等」とある。さらに南北朝期に入れば、新宮熊野神社の鐘銘に「地頭平朝臣明継」なるものも存在している。この「明継」は「明時」の子孫と考えられる。ここにみられる「平氏」は新宮氏と推測されており、新宮荘の地頭であったと考えられている（『喜多方市史』1）。

南北朝時代には会津地域も南北両軍の激闘が続いたのであったが、その中に次のような吉良貞家による結城顕朝宛の「勲功による宛行」の施行状が存在している。

陸奥国新宮庄事、為勲功之賞所宛  
行也、令支配結城參川守、同讃岐  
守、同下総三郎兵衛尉以下軍忠一族、  
任先例可致其沙汰之状、依仰執  
達如件

観応二年十月廿五日右京大夫（花押）

結城彈正少弼殿

（白川文書 国立博物館蔵）

観応二年（1351）に発せられたこの施行状は、吉良貞家が足利尊氏の「仰」を受けて、結城一族に勲功賞として新宮荘を与えるというものである。南北朝動乱の最中であることより、足利方、南朝側に分かれて戦い、所領をめぐる戦いも激しく、合戦の帰趨によって所領所有者も激しく移動したのであった。この時に新宮荘を得た結城氏は足利方であり、従来から同荘の支配の権利を持っていたと思われる新宮氏は南朝方（北畠顕信側）であったと思われる。この抗争の後に南朝方は会津から退却したので結城氏が新宮荘を得るような事態となったと思われる。しかし、吉良貞家もしばらくして失脚する。そのために結城氏は実質的にはこの荘を支配できず、新宮荘は新宮氏の手に戻ったと推察される。

室町時代になると、前述したように奥羽は新しく鎌倉府の管轄下となったのであるが、この奥羽の地には従来より京都の幕府に深く結び付いた勢力が存在していた。そのために鎌倉府側の国人と幕府方の国人との間の争いが起こってくる。その南奥羽の激動の一環として蘆名氏と新宮氏の覇権争いが登場してくるのである。以後、数十年にわたって争うのであるが、新宮氏は敗れて滅亡に至るのである。

前述した稲村・篠川公方が下向した後、会津地域ではどのようなことが起こったのであろうか。稲村や篠川は現在の郡山市近辺で、「中通り」と呼ばれているが、当時は「仙道」と称していた。その地は会津とは奥羽山地を隔てた地域であったこと、また会津地方の史料残存の特徴からして、両公方に関わる史料は多くない。その中に次のような史料が存在している。

応永廿三丙申十一月山越巻数音信役、九月分さゝかわのちんへ山越巻数分、十月分石見公いなむらの御ちんへ巻数了

応永廿三年丙申十月八日鎌倉御所没落同生杉房州同心

(「塔寺八幡長帳裏書」)

出典史料の「塔寺八幡長帳裏書」は会津坂下町の塔寺八幡神社（心清水八幡神社）の神官が、貞和六年（1350）から寛永十二年（1635）までメモした記録であり、会津地域の年々の事件が記されている貴重なものである。この史料の内容に不明な点もあるが、「山越」とは会津から奥羽山地を越えて「仙道」（中通り）に行くことであり、「さゝかわのちん」とは「篠川公方の陣」、「いなむらの御ちん」とは「稲村公方の陣」のことである。また「巻数」とは「ある願い」により読誦した經典等の名称とその回数を願主に贈ったものである。またここにみられる「鎌倉御所没落」とは、応永二十三年に起こった「上杉禅秀の乱」により、鎌倉公方足利持氏と上杉憲定（「生杉房州」は「上杉房州」の誤記であり、上杉憲定のことである）が鎌倉から追われたことを指しており、鎌倉の動静がすぐに会津に伝わったことが知られる。この「塔寺八幡長帳」からいえることは、塔寺八幡神社が応永二十三年九月に篠川公方に、十月に稲村公方に「巻数」を贈り、十一月にも、どちらの陣かははかりかねるが、「巻数」を贈っていることである。塔寺八幡神社は新宮熊野神社の近隣郷に存在しており、この神社は新宮熊野神社を勧請した源義家の父親である頼義が、石清水八幡社を勧請して前九年役の勝利を祈願したと伝えられている神社である。ここから知られることは、新宮熊野神社も、史料は存在していないが、両公方の影響下にあり、新宮氏も両公方と関わりながら所領を支配していたものと思われる。新宮氏にとっては後で述べるように、両公方や鎌倉公方・室町幕府とどのように関わったかが、自らの運命を決めることとなったのである。

稲村・篠川公方の影響力は会津まで強く及んでいたのが知られるのであるが、会津の国人たちは両公方や鎌倉公方の動向、室町幕府の意向にほんろうされていく。前述したのであるが、応永七年（1400）に伊達氏や蘆名氏が鎌

倉府に反旗を翻した二年後の応永九年（1402）に会津地方に戦いが起こってきた。『喜多方市史』4によれば、新宮盛俊なるものが加納莊佐原新左衛門平実詮を攻め滅ぼしたという。争いの原因は不明であるが、平実詮は蘆名一族と推測されることより、従来から存在していた新宮氏と蘆名氏の確執の一端ではなかったかといわれている。新宮氏はこの後、近隣の国人北田氏とともに黒川（現在の会津若松市）を攻撃したのであるが、北田氏が敗れて自害し、この争いは終息している。

会津地域で黒川を拠点とする蘆名氏と、喜多方地方に勢力を張る新宮氏等の抗争があったことが知られる。この応永九年にまたまた伊達氏が鎌倉府にたいして反乱を起こしている。伊達氏のこの時の当主は伊達大膳大夫政宗という人物であり（有名な独眼龍政宗とは別人物）、奥羽の反鎌倉の中心人物であり、幕府と親密な関係を持っていた。また蘆名氏もこの時期に鎌倉府に反抗したことで知られるように、奥羽の親幕府グループの一員であり、この後の鎌倉府と幕府との対立の中でも一貫して幕府方として活動しているのである。応永九年という年に南奥羽地域の仙道（とくに現在の福島県内で）で鎌倉府と伊達氏が抗争を続けていたならば、山（奥羽山地）を一つ越えた会津地域内部の争いが鎌倉府と伊達氏の争い（裏で幕府が糸を引いていたと考えられる）と深く関係すると推測せざるをえないであろう。蘆名氏が幕府と深い関係を持ち、親幕府派ならば蘆名氏と抗争した新宮氏等は当然のこととして親鎌倉府側であったと考えられる。南奥羽に下向してきた篠川公方、稲村公方も両派に分かれて対立するようになる。すなわち篠川公方が幕府側に立ち、稲村公方は鎌倉派となっていたのである。

#### 四 新宮氏の滅亡と新宮城

新宮氏と蘆名氏の抗争の概略をみておこう。応永十五年（1408）に新宮氏と蘆名氏との合戦があったことが知られており、さらにその五年後の応永二十年（1413）にも両者の戦いがあった。この応永二十年という年はまたまた



伊達氏が南奥羽の赤館（現福島県伊達郡桑折町、西山城ともいう）に立てこもって、鎌倉府にたいして反乱を起こした年であった。この年の新宮氏と蘆名氏の争いも、従来からの経緯からして伊達氏の鎌倉府にたいする反抗と何らかの関わりを持っていたものと推察される。あえて深く推測すれば、蘆名氏は伊達氏と連携しながら鎌倉府側の新宮氏を攻撃したものとも考えられる。この年以後、毎年両者は戦いを繰り返すのである。「塔寺八幡長帳裏書」によれば、蘆名方が優勢で新宮氏は次第に追い詰められ、戦いに敗北して越後に逃れるなどということも起こっている。

応永二十七年（1420）以後になると戦いはさらに激しさを増した。当時の鎌倉公方足利持氏は、禅秀の乱以後、上杉禅秀に荷担した関東・奥羽の国人層をきびしく攻撃していた。蘆名氏もその一人であった。そのために蘆名氏は幕府側であった篠川公方と連携しながら身の保全を考えたと思われる（なお稲村公方は鎌倉府側として活躍している）。そして新宮氏をはげしく攻撃した。新宮氏はそれに耐えられず、新宮城や新宮高館城は落城し、越後に逃亡したのである（「塔寺八幡長帳裏書」等）。さらに「同裏書」永享五年（1433）十月二十三日の記載には新宮氏が越後国の逃れた後、「新宮殿兄弟打死、打死数十人」と、新宮氏の滅亡を伝えている。

さてここで敗北した新宮氏の居城である新宮荘内にある新宮城をみておこう。新宮城の規模は外郭東側の外堀は南北約500メートル、南側外堀は東西約450メートル、西側外堀は南北約370メートル、北側外堀は東西約500メートルであり、主郭の規模は、東側内堀は南北約170メートル、南は東西約170メートル、西は南北約150メートル、北は東西約130メートルである（福島県喜多方市教育委員会『会津新宮城跡発掘調査報告書』）。城跡の標高は189～192メートルで、濁川の浸食によってつくられた河岸段丘上に存在している。この城跡は2008年に国指定史跡となり現在に至っている。

城が機能した時期は、発掘による出土物の検討から、12世紀頃に新宮熊野神社や新宮荘と関わって、集落遺跡のようなものが存在したが、城としての実質的に機能した時代は14世紀から15世紀前半であるとされている（前掲



『会津新宮城発掘調査報告書』）。この時期はまさに新宮氏が前述したように国人領主として発展し、活躍した時代であるといえる。

前掲『会津新宮城発掘調査報告書』は、「新宮城を最も特徴付けるものは、新宮城そのものの評価に加えて、新宮荘の中核である新宮熊野神社が隣接している状況であり、14世紀～15世紀前半に地域最有力国人に成長した領主の城館と、平安時代以来続く寺社、両者の併存する姿が中世期の一景観を伝えていることにある」とまとめている。ここでこの地域の景観の特質について指摘されているように、有力国人の城館と有力神社の併存は注目されることである。そしてその関係はどうなっていたのかを検討することは中世という社会を見る上で重要である。それゆえ次に新宮熊野神社と新宮城との関係について見ていこう。

## 五 熊野神社門前町と新宮城

前論文（一）において、中世の新宮熊野神社については詳述した。そこには多くの神像や本地仏、懸仏等が安置され、紀伊熊野神社を模倣した広大な神域と本宮・新宮・那智の三社が存在し、「三六坊」とよばれる壮大な伽藍が存在していたと推測した。そしてこの地域は「社家町」、「寺町」と呼ばれていたのである（『新宮雑業記』）。現在の新宮熊野神社近辺の地名から、「社家町」の有様を見ていくと、『新宮雑業記』の記述が必ずしも誤りでないことが知られる。

かつて「社家町」・「寺町」と称した新宮熊野社が存在している現在の新宮集落には、明らかに都市的な呼び名の地名が存在している。現在でも「湯屋小路」や「馬場小路」と呼ばれている地名がそれである。「湯屋小路」は新宮熊野神社の湯屋にいたる道であったといわれており、また「馬場小路」については中世に流鏑馬を行なった「通路」であると伝えられている（いずれも『新宮雑業記』）。その他にも「北小路」や「道場小路」なる地名も存在しており、「神明道」という小路もある。「高野町（紺屋町）」、「馬場町」、「社

家町」等も存在したという（『新宮雜葉記』）。このように地名から中世の新宮は「都市的」な集落構造をもった存在ではなかったかと推定できる。そしてこの集落には多くの衆徒等が居住していた。

この宗教的集落（「社家町」、「寺町」）は俗世界と明確に区分されているのである。この地域の俗世界において、最高に権力のある存在は国人新宮氏であり、その居城の新宮城（大城）である。この新宮城については前述した通りである。新宮熊野神社の「社家町」は、有力国人領主の居館と隣り合わせに存在していたのである。「社家町」は神域であったことより、俗世界とは「北の沢」（（一）に掲載した地図を参照されたい）で明確に区分されており、『新宮雜葉記』には「北ノ沢、神処ト城トノ間ナリ」、あるいは「新宮社家町ト城ノ間ヲ北ノ沢ト云」とある。そしてこの「北の沢」は新宮城の南側の外堀でもあった。ここにみられるように神域と国人領主の直轄地が混在しているというような状況ではなかった（「北の沢」については後でも触れる）。

さらに「社家町」の内部の状況をみてみよう。前記のように現在でも残されている地名の「湯屋小路」に注目したい。この「湯屋」は古に熱い湯がわき出ていたとされており、その湯は「神前の穢」を無くして祈るためのものであったという（『新宮雜葉記』）。ここに古くから日本に存在する穢観をみることができるのである。現在、新宮寺と神宮寺が合体した真城寺の脇に井戸のようなものが存在している。「湯」を通しての穢観は紀州熊野三山の観念を模倣したものであることは誤りないところである。

紀伊熊野の「湯」は湯の峰温泉にある「壺の湯」である。「壺の湯」は「小栗判官の伝承」で有名であり、中世においては「復活再生の湯」として知られていた。それは「壺の湯」に入ることにより、「穢れた身から健常な身体」に復活再生するという「神話」である。このような紀伊熊野の穢観が新宮熊野に何時の時点かに持ち込まれたのである。

もう一点注視したいのは「補陀楽堂」である。この堂は現在の大同寺の辺りにあったという、紀伊熊野的那智山の補陀楽詣でについては（一）で述べたのであるが、会津地域に存在する新宮熊野に補陀楽渡海があったとは考え

にくいので、この堂の中で紀伊の那智山に倣った何らかの疑似的な儀式が存在していたろうと推定するのみである。このような儀式も「聖」を示すものであったといえる。

「社家町」はどのような範囲であったのであろうか。新宮城の外郭（外堀）としての「北の沢」が「社家町」の境界線であると指摘したが、これは北側である。では南側はどこであろうか。南側には「地獄沢」（現在南側には幾筋か丘陵から流れ出る沢があるが、どの沢にあたるか特定できない）なる沢が存在していたという。この沢は、新宮氏が喜多方地方一帯を支配しているときに、「科ノ者ヲ罰スル処」であったとされている（『新宮雜業記』）。この指摘は処刑場があったであろうことを示している。日本の中世においては、「都市」の境界領域に処刑場や墓場等がつくられるのが普通のことであった。このことから、「社家町」の南の境界は「地獄沢」であったといえよう。また新宮城の近隣にも墓場が存在していた。東側については推測であるが、馬場小路の入り口に東門が存在したと考えられ、その門が東の境界であったと推定され、そこから現在の喜多方市塩川町まで続く参道が存在していた。そして西は背後の山々（丘陵）等で俗界と区分されていたのであろう。

## 六 新宮「社家町」の概観

新宮熊野が存在するところは現在は辺鄙な喜多方市周辺部に属する農村である。しかし平安時代末期から中世において紀伊熊野山から熊野信仰を勧請し、紀伊熊野三山を模倣してつくられた神社であったが、近世初期の大震災で壊滅状況となり、その一部は江戸時代に復元されたが、全体は復元されずに農村の中の神社として存続してきた。しかし、残された史料・資料や伝承等から新宮熊野神社やその門前集落を復元してみると、中世の「町場」としての姿が浮き上がってくる。

新宮「社家町」は北の「北の沢」と南の「地獄沢」の間にあり、西は山々が連なる丘陵で、そこには新宮、本宮、那智の各社殿が連なり、奥の院、一

の寺、阿弥陀堂というような寺院が薨を並べていた。東は塩川まで続く参詣道があり、ここが新宮熊野三山へ入る入り口であった。この東西南北に囲まれた地域は神域として「聖なる地」と見なされて、穢を祓うための方策が成されていたものと推定される。

この「聖地」(「社家町」)の内部は、新宮熊野三所を仰ぐ拝殿(現在の長床)を中心に神宮寺、新宮寺、補陀楽堂等の寺社が建ち並び、穢を祓うための「湯屋」が掘られ、整然たる「小路」が東西、南北に走った碁盤の目のような小路が組みあわさった「町場」ではなかったかと推定され、この「町場」には少なくとも東、南、北の三所に門が存在しており、俗人権力の侵入を阻止しようとしていたのではないかとも思われる。このような「町場」の最盛期は発掘調査から推測して14世紀から15世紀前半のことと思われる。これは国人領主である新宮氏の全盛時代であるといえる。このようなことから俗人権力の城と聖域の新宮熊野神社が管轄を区分して、協調しながらこの地域の領域支配を展開していたものと推測される。少なくとも新宮氏が喜多方地方を支配していた時期には俗人がこの町場に土足で踏み込むことはなかったであろう。

ところがこの「社家町」に「駿河館」なる俗人領主の館が造られた。これは日本中世の「聖域観念」からすれば疑問のあるところである。すなわち、武士たるものは殺生に携わる穢た者との考え方が強かったことにより、「神域」に穢た者の居所を置くことは有り得ないという考え方である。しかし「駿河館」が造られたのは、新宮氏が蘆名氏に敗北して滅亡した後のことである。会津黒川(現在の会津若松市)の蘆名氏が新宮地域支配のために、支城(陣屋)として置いたものであり、政治状況が大きく変化した後になされたものである。室町時代の会津地域の国人領主の攻防の結果、事態は大きく転換したのである。この「駿河館」は蘆名氏の代官西海枝駿河守の居館として、15世紀後半にこの地に置かれたものである。その後、この地に大同寺が建立された。

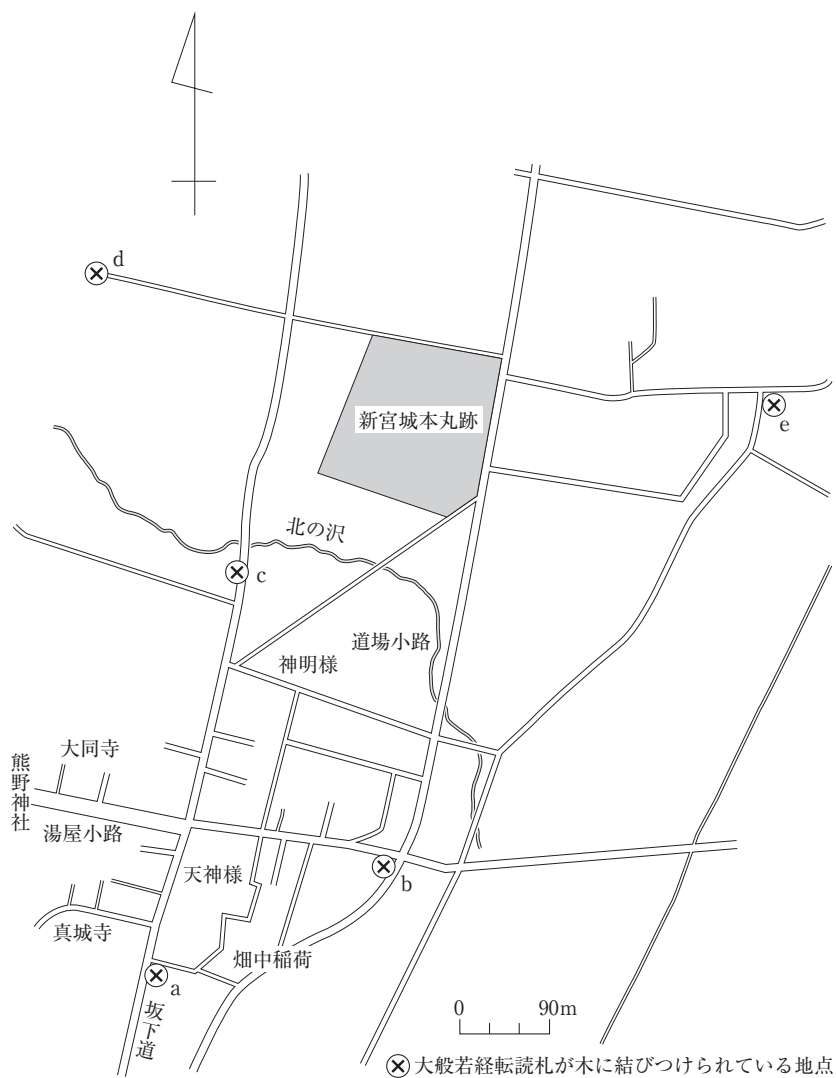
新宮氏が滅亡した後、蘆名氏は「社家町」の一部を黒川に移転させたりし

たことにより、新宮熊野集落は次第に衰退していき、また新宮熊野神社内部の神官相互の対立もあつたりして神社そのものも衰えていった。戦国末期に伊達氏の侵攻により、さらに衰退したが、慶長十六年（1611）の大地震により壊滅的な打撃を受け、「町場」としての景観はなくなり、近世農村に変貌していった。

## 七 現熊野門前集落（慶徳町）の境界儀礼について

新宮熊野神社一帯の地域は、現在は慶徳町新宮と呼ばれている。江戸時代には新宮村であり、江戸末期文化十五年（1818）の同村の石高は883石、明治四年（1871）の調査によれば、在住者は322人であった。この地域は新宮熊野神社を中心に一千年にもわたって連綿として続いてきたので、現在でも独特な民俗行事が残されている。その一つが特徴ある境界儀礼である。

毎年一月八日に、集落の真中、元駿河館があつたところにある普光山大同寺（曹洞宗）において修正会が行なわれるのであるが、そのおりに五穀豊穰、無病息災、家内安全等を願って大般若経の転読が行なわれる。そしてその後、新宮集落の「入り口」の五か所に木の札の呪符がつるされるのである。その呪符には表には「奉転読大般若経（中略）」とあり、裏には「急急如律令」と書かれている陰陽道的なものである。この五か所については次ページの「呪符を示す図」を参照されたい。このような民俗行事の境界儀礼は全国各地に形や呼び名を変えながら存在しており、全国の近世史料の中にもかなり残されている。また、中世の絵巻物の中にも家の四隅や門に呪符が掲げられている絵も存在している。このような事実からして、境界儀礼は古い時代から続いているものであり、年中行事となって全国各地で現在まで続いているものといえる。



(『塩川町史』第一巻より引用、一部修正)

現在の新宮集落と「呪符を示す図」

四隅に呪符がつるされた地域は古代末期より聖的な地域とされていた。境界儀礼の源流は古代・中世に生きていた人々の穢観に到達するのである。その穢とはなにかというと「死穢」・「血穢」と呼ばれるものであり、それが古代・中世においては強く恐れられ、嫌われたのである。その理由は死と深くかわりあっていたからであり、病気や怨霊等も穢とみられていた。そしてその穢を阻止するために様々な儀礼が施されたのである。古代における穢を阻止する儀礼としては、天皇の居住する「宮城」や平安京に病魔や怨霊（死をもたらすもの）が入り込まないようにする「宮城四角四境祭」や「宮城四隅疫神祭」等の様々な境界儀礼が存在していた。その代表的なものが仁寿三年（853）に行なわれた御霊会である。御霊会は穢とみなされる怨霊や疫病等を防ぐ儀礼であるが、この主たる行事は、(1) 経を読み仏を拝むこと、(2) 歌い舞うこと、(3) 力士が相撲をとること、(4) 馳射・騎射等の弓芸をすること、(5) 競馬を行なうこと、(6) 美しい子女が技芸を行なうことであった（『日本三代実録』仁寿三年五月二十日条）。

御霊会は京都から次第に全国に広まっていき、奥羽地域にも入ってきた。会津地方にも熊野信仰が入ってきたころに御霊会に関わるような信仰が入ってきたものと考えられる。新宮熊野神社関係の史料の中に、平安京で行なわれていた御霊会の行事と同じような儀礼があったとする記述が見出されるので、中世の新宮集落でも穢を阻止する儀礼が行なわれていたであろうと考えられるのである。現在の正月に集落周辺に呪符をつるす行事も、本来は穢観にもとづく中世に行なわれていた儀礼が源流であったものと推測される。

「呪符のつるされた場所の図」（前ページの図）を参照しながら新宮集落の境界儀礼を検討しておきたい。この図のa・b・c・d・eの地点に現在呪符がつるされているが、eの地点は近世に開墾された田園地域であり、中世においては原野であったと思われる。それゆえ中世においては「聖域」（社家町）外であり、開墾後に呪符がつるされるようになったものと考えられる。それゆえにもととはa・b・c・d地点が境界儀礼の場所であったとであると推定する。ただし、d地点はcの地点の西側（図では左側、丘陵地域）



にあったのではないかと推定する。なぜならば現在のd地点は熊野神社からかなり離れた一軒家の近くであり、中世にこの家が存在していたとは考えにくいからである。dをcの西側とした理由は、c地点は熊野神社の背後の丘陵から東流する沢（北の沢）と神社から北に延びる道路の交差点の近くであり、ここが新宮城と熊野神社の境界であったと考えられることより、この沢の上流ではなかったかと推測するからである。新宮熊野神社の「門前町」であった新宮集落はa・b・c・d地点の四隅に大般若經に関わる呪符をつるして聖域となしたものと考えられる。そしてその儀礼が現在まで続いているとみなされるのである。

## 八 おわりに

「中世の熊野信仰と地域社会（一）・（二）」と題する論考を通して、南奥羽の一地域（会津喜多方市新宮）の中世の歴史やその社会の特質を熊野神社、熊野信仰等を核にしながらみてきた。さらにこの地域の存在様態・集落の在り方と、熊野信仰が地域の人々に与えた影響、文化財と歴史研究との関わり、国人領主新宮氏や新宮城に触れながら立体的に論じてきた。

この地域は本論で論じたように現在でも熊野信仰を大切にし、御霊会的な正月の行事を保存している。この地域の新宮熊野神社の拝殿（長床）は国の重要文化財であり、新宮氏の居城であった新宮城は国の史跡に指定されている。この地域の人々の一千年以上にわたる歴史がここに示されている。熊野信仰が地域社会の結集に大きな役割をはたしたであろうことは疑いないところである。

## 注

本稿の文責は二・三・四節は都築繁利、一・五・六・八節は伊藤喜良、七節は伊藤理である。

「中世の熊野信仰と地域社会（一）・（二）」参考文献

- 1) 『福島県史』 第1巻 通史編2 原始・古代・中世 （1969年）
- 2) 『福島県史』 第7巻 資料編2 古代・中世資料 （1966年）
- 3) 『喜多方市史』 第一巻 原始・古代・中世 （1999年）
- 4) 『喜多方市史』 第十巻 文化 各論編Ⅲ （2003年）
- 5) 『塩川町史』 第一巻 通史編Ⅰ 原始・古代・中世・近世 （2013年）
- 6) 『塩川町史』 第四巻 資料編Ⅱ 古代・中世・近世 （2007年）
- 7) 『塩川町史』 第七巻 民俗・文化編 （2005年）
- 8) 『会津坂下町史』Ⅱ 文化編 （1976年）
- 9) 『会津坂下町史』Ⅲ 歴史編 （1979年）
- 10) 『会津坂下町文化財調査報告書第58集』「陣が峰城跡」Ⅰ （2005年）
- 11) 『会津坂下町文化財調査報告書代60集』「陣が峰城跡」Ⅱ （2008年）
- 12) 『喜多方市埋蔵文化財調査報告書第14集』「新宮城跡・山崎横穴古墳群」 （2003年）
- 13) 『喜多方市埋蔵文化財調査報告書第15集』「新宮城跡・木曽原遺跡・萩平遺跡」 （2004年）
- 14) 『喜多方市埋蔵文化財調査報告書第16集』「新宮城跡・慶徳城跡」 （2005年）
- 15) 『喜多方市埋蔵文化財調査報告書第17集』「新館跡・新宮城跡」 （2006年）
- 16) 『喜多方市文化財調査報告書代5集』「会津新宮城跡発掘調査報告書」 （2008年）
- 17) 『会津若松史』 第1巻 （1967年）
- 18) 『会津若松史』 第8巻 資料編1 （1967年）
- 19) 『会津若松市史』2 歴史編2 （2005年）
- 20) 『会津若松市史』3 歴史編3 （2005年）
- 21) 『熊野三山の至宝―熊野信仰の祈りのかたち―』 （和歌山県博物館 2009年）
- 22) 『熊野大神』 （戎光祥出版 2008年）
- 23) 篠原四郎 『熊野大社』 （学生社 2001年）
- 24) 『会津の仏像ガイド』 （あいづふるさと市町村圏協議会 2004年）
- 25) 林 哲 『会津芦名四代』 （1982年）
- 26) 新城常三 『新稿寺社参詣の社会経済史的研究』 （塙書房 1982年）
- 27) 五来重編 『吉野・熊野信仰の研究』 （名著出版 1975年）
- 28) 丸井佳寿子他 『福島県の歴史』 （山川出版社 1997年）
- 29) 大石直正他 『中世奥羽の世界』 （東京大学出版会 1978年）
- 30) 伊藤喜良 『日本中世の王権と権威』 （思文閣出版 1993年）
- 31) 伊藤喜良 『中世国家と東国・奥羽』 （校倉書房 1999年）
- 32) 伊藤喜良 「会津の「公方」について」 『福大史学』第80号 （2009年）
- 33) 宮地直一 「熊野神社と熊野山」 『神道論攻』第一巻 （1942年）
- 34) 五来重 「熊野三山の歴史と信仰」 『古美術』42号 （1973年）
- 35) 松井美幸 「熊野三山とその信仰」 『那智叢書』21巻 （1973年）
- 36) 大石直正 「陸奥国の荘園と公領」 『東北学院大学東北文化研究所紀要』22 （1990年）